



Data

監督：アンヌ・フォンテーヌ

出演：ルー・ドゥ・ラージュ/アガ
タ・ブゼク/アガタ・クレシ
ヤ/ヴァンサン・マケーニュ

👁️👁️ みどころ

日本では先日、刑法の強姦罪が強制性交等罪と改正され、「厳罰化」が進められた。しかし、戦争終結時の混乱期には、満州でもポーランドでも集団婦女暴行事件が！日本人は満州でのそれをよく知っているが、ポーランドの修道院で起きたそれは・・・？

この手の事件は歴史の間に埋もれがち。修道院長はそれを望んだが、臨月が近づいてきた、7人の妊娠した修道女たちの運命は？そして、命の危険も省みずその出産の協力をした、若い女医の医師としての使命感とは？

韓国の「従軍慰安婦」問題、日本の「二日市保養所」問題等とも対比しながら本作の悲劇を学び、希望とは？再生とは？を考えるきっかけとしたい。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□ポーランドでは「カティン虐殺」の他、こんな事件も！■□

私は「カティン虐殺事件」を2016年10月9日に亡くなったポーランドの巨匠アンジェイ・ワイダ監督の『カティンの森』（07年）（『シネマルーム24』44頁参照）ではじめて知り、大きなショックを受けた。また、シネマルーム23の第3章「こんな問題作に注目！」の中の「あの虐殺を考える」と題するテーマの中で、『セントアンナの奇跡』（08年）（『シネマルーム23』88頁参照）と『戦場でワルツを』（08年）（『シネマルーム23』93頁参照）を評論した。スパイク・リー監督のアメリカ、イタリア映画である『セントアンナの奇跡』は「セントアンナの虐殺」を、アリ・フォルマン監督のイスラエル、ドイツ、フランス、アメリカ映画である『戦場でワルツ』は「レバノンの虐殺」をテーマとした問題作だった。

「カティン虐殺事件」は、1939年9月1日のナチス・ドイツのポーランド侵攻に伴って、ポーランドは西からはナチス・ドイツが、東からはソ連が侵攻して占領されたことによって起きたポーランド人の大量虐殺事件だ。しかし、あの時代のポーランドの悲劇は、カティン虐殺の悲劇にとどまらず、山奥の田舎町にある小さな修道院でも・・・。

日本の終戦記念日は1945年8月15日だが、ナチス・ドイツの降伏は1945年5月2日。ナチス・ドイツの敗北によってポーランド国内からドイツ軍が撤退し、ソ連軍が占領することになったが、女ばかりの（女しかない）修道院に荒くれのソ連兵が集団で侵入してくると・・・。

■韓国では性奴隷？満州では接待？ポーランドでは？■

日韓の間では、日本の植民地支配時代に起きた「性奴隷」と呼ばれる、「慰安婦問題」がずっと問題になってきた。しかし、これについては、2015年12月28日、日本の岸田文雄外務大臣と韓国の尹炳世外交部長との間で交わされた「慰安婦問題日韓合意」によって、最終かつ不可逆的に解決された。しかしその後、朴槿恵大統領が退陣し、2017年5月10日に合意に批判的な「共に民主党」の文在寅が新大統領に就任したこともあって、合意の履行が危うくなっている。しかして、韓国の慰安婦問題の真相とは？

他方、日本のテレビ界では毎年終戦記念日に向けてそれを特集する様々な番組が作られているが、今年はEテレで「告白～満蒙開拓団の女たち～」が8月10日午前0時から再放送された。これは、敗戦直後の満州で女たちが強いられた辛苦を追ったドキュメントで、8月9日付朝日新聞の記事でも詳しく紹介されていた。

ちなみに、張芸謀監督の『金陵十三釵 (The Flowers Of War)』(11年)では、13人の清楚な女学生たちを助けるために、非道な日本兵に対して自ら我が身を提供する14人の娼婦団たちの姿が描かれていた(『シネマルーム29』98頁参照)が、さて、ポーランドの修道院にソ連兵が集団乱入してきたことによって起きた、修道女たちの悲劇とは・・・？

■フランス人女医の献身的協力に焦点を！しかし・・・。■

本作冒頭、一人の修道女が救いを求めるため雪道を歩いて病院を訪れるシーンが登場する。彼女が辿り着いたのは、フランスからポーランドに派遣されていた赤十字の病院。そして、彼女に対応したのはフランスの女医マチルド(ルー・ドゥ・ラージュ)だが、いくらポーランドの修道院でソ連兵による集団レイプ事件が起こり、修道女たちが集団妊娠していると聞いても、フランスから派遣されている赤十字病院には自分の持ち場があるため、勝手な行動がとれないのは当然。そこで、マチルダはいったん修道女に帰ってもらったが、さて、その後の彼女の行動は・・・？

『カティンの森』ではアンジェイ・ワイダ監督作品だけあって、事件の衝撃度もさるこ

とながら、ドラマ展開の面白さが際立っていた。それに対して、本作はマチルダが夜毎病院を抜け出し一人で車を運転して修道院を訪れ、医師として修道女たちに対して献身的協力をする姿が強調されるだけ。したがって、その意義はわかるものの、ストーリーとしての起伏はあまりない。また、7人の修道女がほとんど臨月になっている今、一人の医師ができることなんてたかが知れているうえ、チラリと見せられる出産シーンはあまりにも簡単すぎるものばかり。マチルダが医師として具体的にどんな献身的協力（治療行為）をしているのかが、私にはさっぱり見えてこない。

もともと、教会の教えに頑なで集団レイプ事件を秘密にしておくことに固執した院長のマザー・オレスカ（アガタ・クレシヤ）の価値観（頑迷さ）はともかく、当初は用心していた修道女たちが危険を冒して修道院を訪れてくれるマチルドを次第に信頼しはじめたのは当然。その先頭に立ったのはフランス語が話せる修道女シスター・マリア（アガタ・ブゼク）で、本件ではマチルダとシスター・マリアを中心とする修道女たちとの交流の中で生まれる信頼関係が繰り返し描かれる。それはそれでわかるのだが、それだけでは映画としては少し不十分なのは・・・？

■□■赤ちゃんの命の大切さは？その命は誰のもの？■□■

合意に基づく行為であれ、レイプであれ、妊娠した女性の身体から赤ちゃんが生まれてくるのは神の摂理（自然の摂理）。しかし、本作では1人1人の修道女のそこらあたりの「苦悩」が全然見えてこないのが、私には不満。また、私の知識経験では女性が子供を産むのはそれなりに大変な作業のはずだが、本作では帝王切開でも自然分娩でもわりと簡単そう・・・？これなら、別にマチルドの命を危険を冒した献身的な協力がなくても、赤ちゃんは自然に生まれてくるのでは・・・？

もともと、修道院での集団レイプ事件は大きな恥だから、何とかそれを隠したいと考えた院長にとっては、生まれてきた赤ちゃんをどこかの里子に出したら、それが噂になってしまう恐れを感じたらしい。慰安婦問題の日韓合意を約束通り履行しない韓国と同じように（？）、母親やマチルドと赤ちゃんを里子に出す約束をした院長は、本当にその約束を履行しているの？私にはそれが心配になったが、案の定・・・。

レイプされた修道女たちは、神にすべてを委ねた修道女であると同時に、女の性と肉体を持った人間だから、妊娠し赤ちゃんを産むと自ずから母性も生まれ、この子は自分のものだ、何とか我が手で育てたい、と考えるのが自然の摂理。また、どこかの里子に出せば、我が子に会いたいと願うのも当然だ。

しかして、本作では時期こそ少しずつつづけているものの、集団レイプされた7人の修道女たちが一人また一人と赤ちゃんを産み里子に出していくことになると、その赤ちゃんの命の大切さは？また、その命は誰のもの？という問題も顕在化することに。また、それと同時に、院長が秘かにとっていた「あつと驚く行動」も暴かれていくことに・・・。訂正

■□■信頼から生まれた希望は？再生は？■□■

8月6日付読売新聞の文化欄にある「著者来店」のコーナーでは、「女性の悲劇、誠実に発掘」という見出しで、下川正晴氏の「忘却の引き揚げ史」をとりあげ、「かつて福岡県筑紫野市にあった『二日市保養所』。この名称にピンとくる人が今、一体どのくらいいるだろうか。」と問題提起をした。つまり、「終戦直後、博多港だけで外地から約139万人は引き揚げてきた。その中に満州（現中国東北部）や朝鮮半島で暴行され、心ならずも妊娠した女性がいた。厚生省（当時）などが、中絶を希望する女性に超法規的に手術を施すため、約1年半にわたり開設した施設、それが二日市保養所だ。」ということだ。

戦後の混乱の中で起きた集団婦女暴行事件に伴う妊娠問題について、この二日市保養所での対応は中絶手術だったが、ポーランドの修道院でマチルドがしたのは出産への協力。もちろん、マチルドはその後生まれてきた赤ちゃんの「処置」についても可能な協力はしたかったはずだが、医師として自分が最低限することはここまでと割り切っていたらしい。そのため、生まれた後の「処置」については、サミュエル院長の意向が大きく働くことになり、問題も発生したが、さて全体としての「処理」の是非は・・・？

本作前半では、その協力と処置はマチルドの個人的なものだったが、後半からはマチルドの上司であるサミュエル医師（ヴァンサン・マケーニュ）たちの協力もあって、マチルドと修道女たちとの信頼の絆はどんどん強まっていくことに……。そして、その信頼によって、肉体にも心にも大きな傷を負った7人の修道女たちにも今後の希望が生まれ、再生への道が模索されることになるが、さてその姿は・・・？それは本作では描かれておらず、私たち観客1人1人が想像するしかないが、本作が見せるその余韻はおみごとだ。私はこの原稿のラストを8月15日の「終戦記念日」の日にかけているが、今年はこんな映画を通じて、「あの戦争」のことをしっかり考えることができたことを嬉しく思っている。

2017（平成29）年8月15日記